

大地は宇宙の中心にあつて特別の地位を占めて居る、然るに若し此地球は其の如く宇宙の中心では無い、何も地球を照すが爲に月も日も星も之を廻つて居るのでは無い、只地球は宇宙の片隅の一つの星に外ならぬ、他の星と何も異別ことばつた事は無い、異別ことばの事が無いのみで無く、他の多くの星に較ぶれば、實に數ふるにも足らぬ程小さいものである、宇宙の宏きに較ぶれば、一粒にも價せぬ様なものである、而してそこに實に小さい人間が住んで居るのであると思つた日には、今までの考は一時非常に動いて來ねばならぬ、宇宙の中心なる大地に主人として居るといふ考と宏い宇宙の限りない處の其片隅の只一粒にも價せぬ様な小さい地上に住んで居るといふ考とは非常に違ひがある、ところが此の如き非常の變動を其時の思想に始めたのが即ちユヘルニユスの地動説であります、

誰れも知つて居る通り、ユヘルニユスの説に従がへば、太陽が中心で而して其の周圍を地球又た其の他の遊星が廻つて居る、夫れが一つの大陽を中心として居る星の組である、尙ほ段々と研究して見ると、それ等の組がその外に幾許いくつとなくある、我が大陽が宇宙の中心ではない、無数の恒星は皆各々大陽であると思はれる、我が大陽よりも餘程大なるものが多い、斯様に考へて見れば、地球の位地が非常に變つて來る、併し夫れが變つたからと云つて何もさう非常に入釜しく云ふ筈もなかつたらしく思はるゝであります、前申す通り宗教上の思想が夫れに結んで居つたから、ナカノ、入釜しかつたのであります、歐羅巴では夫が一大變動と名づけて宜しい程の變動であつたのであります、我國杯では此天文上の新説が左程の劇しき變動とも思はれなかつた、思想上劇しき影響もなかつた、素より我國

でも誰も皆此大地は靜かに宇宙の中心に居る様に考へたのであります、然し大分昔から段々地球の動くといふ説が這入つて來ました、名高い畫工そがきの司馬江漢が書いたものを見ますと、自分が始めて日本に地動説を唱へたと云つて大にそれを誇つて居ります、其の江漢の時代即ち今を去る百年程前から段々其説が這入つて來て、今では小學校の子供でも此のユベルニコスの説を知らぬ者はない、ユベルニコスと云ふ人物は知らないでも、其説を知らぬものは無い、地の動くとは最早當り前のこの様に思つて居る、此説が歐羅巴に起した思想上の變動は只だ我國人の考からのみ見てはわからぬ、歐羅巴では前申した通り宗教上の思想が結び着いて居つたから、此ユベルニコスの説に當時非常の反對があつて、ユベルニコス自身も此説を唱へる時には表面上之を只一つの臆説として、斯うも考へる事が出来る、

然し何も實際之を信じて居るのでは無いと云つて出したのであります、若しもユベルニコスが此説を出す時に、自分は眞に斯う思ふ、是でなければならぬと云つて出したらば、或は其生命は危かつたかも知れませぬ、彼の剛膽なるシヨルダン、ブルノー、彼の焚殺さるゝ時自分を裁判した人々に向つて我よりも汝等が恐れ戦いて居るでは無いかと叫んだシヨルダン、ブルノーの説も矢張り此のユベルニコスの説を取つて之を編み込んで一つの大きな考と爲して居たのであります、ガレリオも矢張り此説を取つて之を唱へたが爲に當時には非常に反對を受けて、遂にガレリオは屈して表面上其説を枉げました、近世哲學の始祖とまで云はれるデカルトが始め「ル、モンド」といふ書物を書きました時に矢張りユベルニコスの説を其中に取つて居りました、ガレリオの迫害されたとを聞いて恐れて其書物は出さ

なかつたと云ふとであります、是等を以て見ても其時の歐羅巴の思想の變動の劇しかつた事がわかる、今で見ると、夫等の説を出して何の憚る所も無からう、夫を心配するのは實にデカルトも意氣地が無いと思はるゝでありませうが、併し當時にあつては夫が非常に六ヶ敷かつのであります、此の如き反對はありましたが、遂に地球は只だ一つの小さい星に外ならぬ、宇宙の中心では無いといふ事になつて仕舞つて、今では誰一人として之に反對するものは居らぬ、宗教上からも反對するものは居らぬ、當時では宗教上の思想と是が反對しましたが、今では決して此様な説と宗教上の思想とが相反するものでは無いと云ふととなつて來ました、

尙ほ其後段々天文學上の研究又た其他の研究によつて觀れば見る程、宇宙といふものは大なるもので、夫に比較して地球の小さいと

が益々わかる、夫を極く分り易く喩へて見ませうならば、光線は一秒時間に七萬六千里も走りますが、其一秒時間に七萬六千里も走る光線が三百年も掛つて始めて地球に達する様な遠い距離にある星を我等は望遠鏡で見る事が出来る、殆ど想像にも載らぬ程宇宙は宏いものとなつて來ました、其星から光線の走つて來るに三百年もかかる、先づ云はゞ徳川幕府が建てられた家康公の時代に一つの星から光線が出立して夫が一秒時間に七萬六千里も走つて、そして始めて此頃漸く地球に到着したといふ程に遠い星が見える、實際その如き星が見えるのであります、斯う思つて見れば、地球は宇宙の片隅の極く小さなもの、其外にどの位大きな星があるかわからぬ、地球又其他の遊星の中心と見て居る太陽よりも尙ほ大きな太陽が澤山ある、天に光つて居る恒星が皆太陽である、今の天文學で斯く説くとは誰

も知つて居る通りのもであります、是が歐羅巴の思想の一大變と私
が名づけて置いたものであります、

次は其地球に住んで居る人類の位地に大變動が起つて來た、素と地
球が宇宙の中心で特別の位地を占めて居ると考へた様に、人類は又
外の動物とは異つた特別のものであると考へて居たのです、地球が
中心であつて其外のもは皆其の爲に之れを廻つて居ると考へた様
に、此地球に於ては人間が特別に違つたもので、外の動物とは較べる
事も出來ない程に懸け隔つたもので、下等動物と人間との間には逆
も踰える事の出來ない隔てがあると、斯く考へたのであります、人
間は萬物の靈長と云つて人間が殊に貴いものとなつて居るのは何處
でもさうであります、殊に歐羅巴では是が又宗教上の思想に結び
着いて居つたのであります、夫は世にある種々の動物は皆特別に神

に造られ、就中人間は神の象かたちに似せて特別に造られたと考たのであ
ります、夫故下等動物即ち畜生と名けて居るものとは人間は少しも
關係の無い別のもので、特別に造られたものである、是は外の國の
思想と較べて見ると大に其工合が違ふ、印度では昔から輪廻轉生の
説が行はれて、人間の靈魂が墮落すれば畜生の中にも這入つて畜生
となつて生れると考へた、夫故畜生と人間との間に越えられぬ隔て
は無い、悪くすれば人間も畜生になり、善くすれば畜生も人間に生
れることが出来る、輪廻轉生の説は印度のみでは無い、他の國にも
あつた、然るにこれは中世期以來の歐羅巴には行はれなかつた、人
間と畜類との間にその如き關係は無い、人間は人間で特別に造物主
に造られたもので、外の動物とは飛離れたものである、此事が人間の
位に非常な關係があつて、人間は夫故特別の位を有つて居るもので

あると斯う考へたのであります、然るにこゝに又非常の變動を起したのは動物進化論であります、動物進化論では如何に説くか、何も特別に此の種類彼の種類と一々に造化主が造り設けたのでは無い、極く下等なる動物から進化して高等なる動物となつて来たのであると説く、此説を最も明に唱へたものは誰ぞ、何人も知つて居る通りダーウインである、ダーウインの説に従へば進化は要するに自然淘汰を以て行はれる、自然に動物が淘汰せられるといふ意味は、澤山の動物が世に生れて来るが、同じ親に生れても幾らか違ひがある、五匹生れれば五匹とも皆同じでは無い、親に似て居るけれども又相互に幾らか違ふ、而して其違ふものの中で其場合に適して能く生存するものと生存に適せぬものがあつて、不具かたやのものは能く生存しないから夫は亡び易い、不具と迄云は

ぬでも、特殊なる事情によつて適したものと適せぬものがあるから、適した物は生存し適せぬものは滅びてゆかねばならぬ、夫で動物が段々選り分けられて、自然に選り分けられて、残つたものが子を生んで、其中から又選り分けられる、此自然淘汰の長く續くうちに、最初見なかつた動物が出来てくる、自然淘汰の爲に後には非常に違つた動物が出来る、其動物が世の中に發育し又變遷してゆく、即ち今別の種類と見えるものも素と別々に造られたのではない、同じ祖先から進化して出て来たのであると、斯くダーウインは説いたのであります、夫故何も人間といふ一種類に限り特別に造りなされたのでは無い、矢張り下等なる動物から前云ふ自然淘汰で段々高等なるものとなつて、遂に人間が現はれて来たのである、人間は猿の子孫である、今生きて居る様な猿から人間が出て来たかどうか分ら

ぬが、兎に角猿の如き動物から出て来た、人間は猿の子孫である、猿の苗裔である、と斯様に説いて来たのであります。勿論生物の進化といふものは自然淘汰のみで出来るか又自然淘汰と云ふは審に云へば如何なるものであるか、又自然淘汰の行はれてゆく其奥底に目的を具へて働いて居る者がありはせぬかといふ如き問題に就ては固より種々の論があります、併しながら兎に角生物學上では少なくとも自然淘汰といふのが進化の一大方法であるといふ事だけは疑はれぬ、一口に約めて申せば、動物は一種一種別々に造られたのではなく、極く下等の物から段々進化して来たのである、進化の道は或は色々ありませうが、兎に角進化して来たといふことは(即ち動物進化説は)生物學者の公論である、(動物進化説は)生物學者の公論である、斯く考へて見ると、人間の位地に非常な變動が起らなくばならぬ、

前には人間は特別に造化主に造られたもので、他の動物とは比べも出来ぬ、人間には特別の位地があると思つたのが、さうでは無い、矢張り下等動物から出て来たものであると思つて見ると、下等動物の親類になつて仕舞ふ、昔し我國で穢多の親類になると云つたら大變などの様に思はれた、丁度其様に畜生と云つて卑げしめる下等動物の親類となるのですから大變な事です、人間がスツバリ其直打を損して仕舞ふ、それのみでない、自然淘汰で種々の動物が出来てくると云ふは、造物主の働をなみするのである、是れはどうも宗教上の思想から許されぬ、と斯様に考へて、一時動物進化説には非常な反對があつたのです、併しながら此進化説は反對を受けたもの、矢張り今では此説が勝を得て居ると云はなければならぬ、
 啻に形跡上動物が進化するといふのみでは無い、進化といふものは

心の上にもある、人間の心と云つて下等動物と非常に違つたもの、
 様に思ふけれども、夫も矢張り進化してさうなつて來たので、下等
 動物にも矢張り心がある、下等動物の心と人間の心と較べて見ると
 矢張り聯絡がある、踰える事の出來ない懸隔は無い、但だ人間は大
 に進化したもの以外ならぬと云ふ考が今は盛に行はれることとなりま
 した、夫で兎に角進化といふこと丈けは今は否まれぬ、尤も進化の
 みて凡べての事が説けるかどうか夫は別論であります、進化とい
 ふ事を否む事は出來ぬ、

斯様に特別の位地が地球から奪ひ去られた様に、人類の特別の位地
 が又奪ひ去られた、其特別と云ふも素からの特別ではない、進化の中
 の特別である、言換へて見れば、差別はあるけれども皆平等の中に
 起る差別である、人間は矢張り生物の長である、萬物の靈長と或意

味では云ふ事が出来る、併しながら夫も進化して來て其頂上に居る
 丈けの事である、何も初から下等動物と聯絡の無いものではない、
 人間の位地を奪はれて仕舞つた様に思はれるけれども、只だ特別と
 いふ意味が變つて來たので、人間は矢張り人間で動物の頂上に居る、
 夫のみで無い、進化といふことが非常に大なる理想を吾人に與へる、
 我等は斯う造られたから其儘で居るといふのでは無い、進化してゆ
 ける、極く下等なる動物から段々進化して人類といふ様なものにな
 つて來るといふは實に妙である、極く低い動物が夫程のものになつ
 て來る、進化といふは實に驚くべきものである、我等は又段々進化し
 て行く事が出來ると考へれば、吾人の胸中一大理想が湧いて來る、人
 間が特別に造られたといふ如き考は壞はれて仕舞つたけれども、尙
 ほ外の處から吾人には大なる理想が現はれて來るのであります、

近來誰も人間は進歩しなければならぬ、人類社會は進歩してゆくと云ひます、進歩的／＼といふ事は誰も口にする事であり、併しなから我國で三十年も昔に溯つたならば進歩といふ言葉は珍しい言葉だと云つても宜しい、ところが今は珍しくない、一寸一葉の新聞紙を讀んでも、直ぐに三つか四つは進歩といふ字が見える、進歩と云ふとは近世の人々の心を刺激した大思想であります、而して此の大思想は進化と云ふとに由つて益々勵まされたのであります、歐羅巴では斯やうに此地球の位地と人類の位地とに就いて思想上の大變動があつた、夫が非常な變動であつたといふは、前述べました通り宗教上の思想が伴つて居つたからです、而して今や其宗教夫れ自身——歐羅巴に行はれて居る宗教夫れ自身が又一つの大なる變動を經過しつゝある、是が此處で御話申す三大變の第三であります、

宇宙の中心と思つて居つた地球の地位に非常な變動を起した、地球の位地に變動を起したのみで無い、其地球の主人と思つて居た人間の位地に非常な變動を起した、夫から又人間の事柄の中影響の最も廣く最も深い宗教上の考に非常なる變動を起しつゝある、之を私は三大變と名づけるのであります、

歐羅巴に行はれて居る宗教が無上無類の宗教で、他の宗教とは全く其生起そとを異にし其性質を異にして居るといふのが、是まで其の宗教家杯の通常の考であります、恰も黒と白とが違ふ様に畜生と人間とが違ふ様に歐羅巴人の奉ずる宗教と東洋又其他に行はれる宗教とは違つたものであると考へたのです、歐羅巴人は他の宗教を奉じて居る人々をヒーズンと名ける、ヒーズンと云へば誰も知つて居る通り非常にさげしめた言葉であります、他の宗教を奉じて居るものは罪

人である全く間違つた事を信仰して居るものである全く暗黒の中に居るものである、夫とは全く違つて光明ひかりの中に居る者は只だ我等のみだ、唯一の本當の宗教は我等歐羅巴人の信じて居る宗教であると考えたのです、固より歐羅巴の宗教家神學者の中にも異論はありま
す、その如く考へぬ學者もありません、而して異論者は重もに希臘哲學思想の影響を受けた人々であります、併しながらその如く考へたのが通常の説であります、其説を擴げるに力あつたのはオーガスタ
ン、歐羅巴の宗教家の中大人物の一つに數へられ、兎に角大人物に數へなければならぬオーガスタンであります、其説に隨へば、他の宗教と基督教とは黒と白と、穢多と侍まじらひといふ様にスツカリ違つたもので決して關係が無い、較べる事の出来ないものである、故に他の宗教の中にあるものは皆罪人で滅びなければならぬ、只だ救はれ

る者は基督教の中にある者ばかりだと考へた、是れが通常の思想であります、

然るに今歐羅巴の思想の傾きを見ると、こゝに大變動が現はれて來て居る、今や右云ふ如き思想は廢りつゝあると斷言して私は差支なからうと思ふ、其宗教も他の宗教と較べて、何も明と暗との如く特別なる隔てのあるものではない、固より特殊なる點もある、他の宗教と似て居らぬ點もあるけれども、夫も均しく人類の宗教的現象の一つに外ならぬ、人類の宗教心が段々發達してゆく一段階に外ならぬ、即ち宗教が低い處から進化してゆく一つの段階で、其段階には佛教もあれば基督教もある、其中一つの宗教を取つて是が特別に天から降つて來て、或は地から湧いて出て、他の宗教とは性質來歴に於て全く違ふ宗教であると云ふとは出來ぬと、斯く考へることが益々

盛になつて来て居ります、
 當今歐羅巴には斯る宗教思想の變動があると申しましたが、此變動に對しては反對がまだナカ／＼強い、諸君が容易く聞く事の出来る程其反對の聲は高い、今申す三大變の中で尙ほ最も反對の多いのは此宗教思想であります、地球の動くといふ説には誰とて今は反對する者は無い、地動説よりも生物進化説の方にはまだ幾らか反對がある、然し甚だ弱い、生物進化説は今の學術界の公論と云つて宜しい、然るに第三の宗教思想の變動にはまだ反對が強い、是は一つには其變動の起りかゝつた時代の前後にもよりますが、又一つには事柄に於て違ふ所があるからです、天文の事は算術上キチンときままるものであります、生物の進化は算術上キチンときめる事は出来ぬ、幾らか疑を容れる餘地がある、然し大に實驗を以て證すると出来る、

然るに宗教は之とは違つて更に一層複雑でもあり又試験を以て證明する事が六ヶ敷い、故に是は地動説よりも進化説よりも反對を容れる餘地がある、併しなから大勢は既に慥に動いて居る、丁度地球が特別に外の天體と異つて宇宙の中心で無く一の小さい遊星に外ならぬ様に、又人間が特別に下等動物と違つて造られたので、無く動物進化の一産物に外ならぬ様に、歐羅巴にある宗教も他の宗教と共に宗教進化の一産物に外ならぬといふ思想が勝を制しつゝある、これが思想の大勢であります、此大勢に逆はうとする人がまだ多くありますけれども、到底之を防ぎとめるとは出来ぬと思ひます、是れが思想の正當の行道であります、無闇に特別と思つた考は破れて仕舞ひますが、是によつて地球の位地にも人間の位地にも又歐羅巴の宗教の位地にも却つて其眞實の直打を與へるとか出来ます、

今迄辨しました通り、私の演題に掲げました三大變は、第一が我等の住んで居る地球の位地に關し、其の次ぎは其地球の主人と思はれた人間の位地に關し、第三は人間の事柄の中で最も深く吾感情に沁み込み最も深く社會に行き渡る宗教上の思想の變動であります、是が三大變であります、大といふ字を加へて然るべき變動であらうとおもひます、此變動を見渡しまするに、皆な眞實ならぬ差別と懸隔を毀つものであると云つて宜しい、地球と他の星との眞實ならぬ差別、人間と他の動物との眞實ならぬ懸隔、何々教と云つて他の宗教とは黑白の違ひがある様に思ふ眞實ならぬ差別を毀つて仕舞ふのであります、故に此の三大變は眞實ならぬ差別懸隔を毀つて平等にする所のものと云つて宜しからう、併し全く差別を否むではないが、其の差別は平等の中に起る差別です、始めから定まり居つて動かす

ことの出来ない差別では無い、動いて進歩して來た中の差別であります、差別は進歩したのと後れたのとにある、

歐羅巴人は白人種と云つて白人種のみが無比の人種で、世界の文明を支配し世界を押領する、他の人種は到底文明の先導者となるとは出来ぬと思つて居る、併し此説も壞はれて來る、我等は現に之を壞はしつゝある、何も白人種のみが進歩するものではない、我等も進歩する、白人種のみ戦争が上手では無い、我等も戦争をよくやつて見せる、白人種のみが世界の歴史をなすのでは無い、我等も世界の歴史をなす事が出来る、斯く云ふ考は我等日本人の腦中に今勃々と湧いて來て居る(拍手喝采)、是れ右申す三大變と矢張り聯絡して居るとでありあます、強ち白人種たると白人種たらぬとに今云ふ如き本來の差別はない、是れ亦眞實ならぬ差別である、我等も矢張り進む事

が出来、然し我等日本人はまだ望むべき程進んで居るではない、
 まだ世界史の大部分をなして居るものとは云へませぬ（ヒヤ〜）、
 爲す事が出来るといふ思想は懐いて居る、是れからが即ち爲すべき
 時であると思ふ（拍手喝采）、今迄は只東洋の片隅に一國を長く建て
 居つたといふ事實はあるけれども、世界の文明の潮流に何程の影
 響を及ぼしましたか、我等はまだ世界史の大勢の一部分を爲したも
 のでは無い、是から爲すべきである、進めば爲せる、奮發すれば爲
 せる（拍手喝采）、是即ち國民の自覺心であります、自己を忘れて仕
 舞つて只他の真似ばかりして居る様な事ではならぬ、併し國民の自
 覺心と己惚とを混同してはならぬ、モウ是で宜い、尤いものになつ
 た、モウ満足だと思ふ己惚を起したならば、本來差別がなくとも後
 れて仕舞ふ、我等は今が始めであるといふ事を忘れてはならぬ、總

ての社會の事に於て、色々の工業に於て、商賣に於て、學問に於て、
 其外總ての事業に於て是からやつてゆくのである、決して満足して
 はならぬ、故に今我等の最も心を置くべきは無窮の進歩といふ思想
 であります、限りない進歩といふ思想に動かされて我等は進んで行
 かねばならぬ、何處までも進んでゆかねばならぬ、若し満足だと思
 つたならば、日本國民は夫れきりであらうと思ひます（拍手大喝采）、
 故に我等は此世界の大勢に始終氣を附けなければならぬ、今から世
 界の大舞臺に出るのであります、日本は日本であるといふのは宜し
 い、併しながら其意味が若し我は他の事は少しも知らぬ、他に學ぶ
 とはいらぬ、只だ日本は日本で獨りやつてゆくと云ふとならば、夫
 は再び鎖國の間違を來すのである（拍手喝采）、それではいかぬ、日
 本は日本でやるけれども、世界の舞臺に出るのであるから、常に萬

國の形勢に注意して探るべきものあれば一刻も早く探るべきである
(拍手喝采)、他を排斥する事は自覺心でも何でも無い、此間違をな
さずに、何處までも進んで行いたならば、日本の將來は實に洋々と
して海の如く其進歩の界限を知ることが出来ぬ、我等は實に千歳一遇
の時に生れたものと云はなければなりません(拍手大喝采)、

○我同胞兄弟の對外思想

尾崎 行雄 君 述

至極面白い話の後に御話することは極めて淡泊無味なる事柄であ
るのみならず不幸にして今夕は氣管支加答兒を煩ふて聲が出ぬで甚
だ聴き取り悪いであらうと思ひますけれ共暫く御清聴あらんことを
冀ひます(謹聽)我同胞兄弟の對外思想と言ふは諸君を始めとして吾
々が皆世界列國に對して考へて居る事柄の概畧を述べる積りであり
ますが、それで段落を別つて便宜の爲め凡そ三つに別けることが宜
しいと思ひます、第一は鎖國時代、第二は崇拜時代、第三は自負時
代とでも云ふたが宜からうと思ひます、
此第一の鎖國時代には諸外國諸外國人に付て我同胞兄弟は如何なる

考へを以て居つたかと言ふと、諸君皆御承知の通り甚じきに至つては毫も彼が學術其他の智識を備へて居ることを知らないのみならず殆んど不具者若くは禽獸の如く諸外國人を輕蔑して居つたのが概して鎖國時代の有様であります。一度諸港を開いて諸外國人と交際を始め、以て以來其事が一變して段々彼を知ることが、誠に知るのではありません。極く間違つて知つたのであるが、彼を諸外國の有様を一小部分知れば知る程何だか彼れを拜むやうになつた、西洋の人の西洋の事とさへ言へば善惡邪正を問はず悉く採用し之を尊敬すると云ふやうな時代が明治十四五年以來殆んど近來まで行はれて居つた（拍手喝采）其何事にも拘はらず彼を崇拜して居つたと言ふ時代に我同胞兄弟の諸外國に對して如何なる考又は如何なる知識を持つて居つたかと言へば、眞に一小部分に過ぎずして西洋諸國の事情知識を

飲み込んで居つたと言へない、僅かに我居留地に居る多くはゴロツキの西洋人、歐羅巴若くは亞米利加の本國に居る人とは全く人種の異るときでに思はるゝ所の人間、言語容貌風采道德性質の點に於て殆んど同一人種とは思はれぬ程の惡るい人間と偶々交際を致し即ち本國から出て来る色々な人がありますけれども其中の十中七八までは先づ本國で立派な暮らしが出来ずして、何處か流寓し廻たなれば何か生活の道が付かうも知れぬと云ふ考へで多く出掛けて参つた、それも直接に日本に参れば宜しいに日本に参つた歐米人と言へば大抵印度に出稼ぎに行つて印度でゴロツキ、香港上海等を食ひ上げて段段神戸横濱の居留地に参る者が極めて多く、斯の如き人間を見て彼が西洋人である、彼は文明の知識道德其他のものを代表して居る歐米人であると我々同胞兄弟は考へた、斯く考へた時分には餘程輕蔑

の念が起らなければならぬけれども、攘夷時代の禽獸の如く考へて居つた時代の反動として、あの通り卑劣の詰まらぬ西洋人であつても、我に較ぶれば知識に於ても富んで居り色々な世界の事物を見聞して居ると云ふ、今日の留學生其他洋行生などが單に皮想の文明、西洋の何たるを知らず何事に拘はらず崇拜の念慮を齎してそれと之とが合して彼の如き詰まらぬ人の知識及び事物人物に至るまで大層有難く思ふて二も二もなく崇拜致すと云ふことが餘程久しく明治十四五年以後近來に至るまで日本全軀を風靡して居つたと云ふ有様で（喝采）此時代に我同胞兄弟は如何なる馬鹿氣た事をして居るかと云へば、西洋の長を取つて我短を補うと云ふ一般の人の言葉であつたが其實を見れば決して其長を取る丈けの我々に知識がなかつた、學ぶ所は彼の悪い所彼の短き所彼の不都合な所が一番學び易いので

ある、西洋人の悪い真似をするのである、其師匠たるものは諸方をゴロツキ喰ひ上げて日本に參つた一番悪い西洋人に就いて、其人の持つて居る一番悪い所を學んで、之が西洋の文明であると言つて我國の人が採用した、故に西洋の人は仁義道德に乏しく利害に依つて身軀を決する者であると云ふのが崇拜時代に起つた感想である、西洋人は道德の觀念は極めて少いと云ふとを専心一意に信じて居る人が今日と雖も尙ほある、况んや其彼を崇拜する時代に於ては道德を捨て君臣父母兄弟も之を棄つるを以て文明の賜である、進歩した人間と云ふものは總べて利益を目的としてしなければならぬと云ふが如き考を衆人高坐の前で起すのみならず、公然と口に發することを憚らぬと云ふ殆んど化物同様な時代、之を吉原田圃で石川君に見せたら餘程面白き研究の材料になつたに相違ない、其時代の所

謂西洋好き所謂西洋を摸倣した文明人種と云ふ人を則ち日本社會にある文明人種と云ふ人を見ますれば、先づ利害を先きにして道德の觀念は極めて乏しいので、又其言行は輕躁浮薄を極めて居つた、一の徳行の君子のないと云ふのが先づ概して西洋的の人の考へて居つた所でありませう、果して西洋諸國の人は利害のみに依つて進退去就を決するかと言へば決してさうでない、徳行の君子が出でないかと言へば決してさうでない、崇拜時代に於ては我眼の昏らんで居つたが爲に長所を取ると云ふのが一番悪い所を手本として一番悪い所を輸入致した、踊りを躍るのは文明の本色である大臣等が鬘を冠つて踊らなければ外交上の役目が務まらぬとまで誤解して居つた、(拍手喝采)此時に當りましては世間皆西洋人を尊ぶ朝野の別なく、決して政府の人ばかりでなく車挽に至るまで西洋人と日本人と一緒

に歩るいて車を呼ぶと、先づ西洋人の方に飛んで往つて我同胞兄弟はソツチ除けにして置くのが其時代の有様、又私が其頃向島に花見に参つた所が枕橋の邊に巡査が居つて是より先人力を乗り入れることはならぬとあつた、然るに其私の前に人力に乗つて参つたものがある故に、何ぞ彼れは許して拙者を許さぬのであるかと言つた所が、彼れは西洋人である、西洋人なら車に乗つて這入つて宜しい、日本人は何として車に乗つて入ることが出来ないか、其時私は書生の事でありませうからして押返して巡査をカラカイながら尋ねた、イヤそれは警視廳から訓令がある、從五位以上の人及び外國人は車に乗つて這入つて宜いと云ふ訓令があると言つた、外國人でさへあれば亞弗利加の黒奴でも、亞米利加の車挽でも、英吉利の魚賣でも、穢多の如き靴磨きでも、我從五位以上と同等の扱ひをするかと云ふに

至つては何たる有難いことでありませぬか(拍手大喝采)凡そ國を建つるに當りては内外輕重の區別を立てなければならぬ、悪くとも内を重んじ善くとも外は輕んじなければならぬ、若し之を公平に致して内外別なく、四海皆同胞と云ふことであれば一番高尙の時代だけれども、其實際に於ては國の境に關門を築いてイザと言はし戦ひを始めると云ふ野蠻なる時代は許さぬのであります、今や國の境を嚴然と立て、一朝事あるに當つては刃を以て之を決すると云ふ列國境を立て國を成して居る今日でありますから日本の方が重い、内國人は大切に外國人は輕いと云ふ觀念が國民一般に往き渡つて居りませぬから、豫めて拜んで居る佛様に向ふては陸海軍の人と雖も鐵砲は撃ち悪いと云ふ觀念の起るのは無理ではない、現に十四五年の頃は是等の人があつた、昔支那を尊敬して居つた時分に、孔子が大將

軍となり、孟子が參謀官となつて日本を攻めて來たらどうするかと云ふ有名なる質問がある、さうしたら一言もなく降參するより外に仕方がないと漢學書生の答へたことがある、是は世に名高き話でありますけれども、歐米を崇拜する時代にあつては、矢張りスヘンサでも攻めて來たなれば是には降參しなければならぬと云ふ考を同胞兄弟は餘程持つて居つたのであります、實に之が國家に取つては一番の弱點、陸海軍弱しと雖も憂ふるに足らず、我同胞兄弟を侮り、我國人が日本國を侮るは一番國家の弱點である、此の如きことの心に蟠る時には陸海軍ありと雖も決して其國が強くなることは出來ない、然るに事態それに反して一も西洋二も西洋、甚しきに至つては容貌風采に至るまで西洋人に似て居ると云ふことを以て人に誇るやうになる、如何にも西洋人に能く似て居る、顔も西洋人に似て身躰

も大きく、毛まで赤く西洋人に似て何處から見ても西洋人であると云ふと、嘗に書生のみならず役人杯が意氣揚々として人に誇る者も猶ほ随分残つて居る時代で、考へて見れば我日本人の面色は西洋人に違ふのが本質である、西洋人の如く色が白く目が變で、髪が黄色くわつて身軀の風が違ふなれば、是は日本人種から言へば不具者である、故に日本人にして西洋人に似たりと云ふことは、言葉を換へて之を言へば以前は不具であると言ふと同じことであるのに、意氣揚々として是見よがしに人に誇ると云ふに至つては、實に人の迷ひと云ふものは斯くまで不具と呼ばれても喜ぶと云ふまでに西洋が有難くなつた(拍手大喝采)時代であります、之が攘夷鎖國の時代に次で起つた所の崇拜時代であつた。

此時代の實況は私が詳しく申すまでもなく、諸君が現に皆見られた所であつて、其弊風を誘なつた人が世間に多かつたが爲に遂に今日は一變して餘程形勢が變つて參つたが、變つた現在如何にと云ふと、眞正に彼を知り己を知ると云ふのではなくして、自負傲慢の今日は時代であらうと思ふ、幾許か西洋の知り方が進んで、己を知ることが餘程進歩致しまして、崇拜時代に較ぶれば今日の時代は、對外思想は餘程進歩致して居るには相違ないけれども、尙ほ彼をも知り自分をも十分には飲み込んで居らぬ、偶々支那と戦つて勝つたと思ふて非常に理不盡を起して我日本程尤らしいものはないと云ふ人が世の中に出て來たのは今日の時代であらうと思ひますが、其人は四五年前までは西洋人の爲には馬車の尻までも拜んで宜しいとまで考へて居つた人である、(拍手喝采)併ながら自負と雖も猶ほ内を輕んじて外を重んずると云ふ時代に較れば遙かに優つて居る、列國內外輕重

の區別を明かに立つるには間違つても猶ほ己を重んずると云ふのは宜しいに違ひない、世人が頻りに有難がる所の外國及び外國人と云ふものは何であるか、同じ唐物屋の前に參つてコップを買はうとするときに、コチラのは日本出來であるから拾錢、是は外國輸入品であるから拾五錢、コップの上に乗せて西洋品は五錢高いのである、西洋人は何ぞ有難いのであるか少しも分らぬ話である、今日に於ても其影響が残つて居る、外國が有難かつたのが間違ひながらも自負時代に這入つたと云ふのは私共非常に感ずる所でありませうけれども、扱て如何せん此儘にして進んで往きますれば其結果や決して純良なる者にはなり得ぬ、どうしても内外輕重の區別を明かにすると云ふとを根本に立て、置いて而して十分に彼を知らなければならぬ、又我をも十分に知らなければならぬ、何にも知らぬ唯己獨り知ると云ふ

觀念は是は無智なる人の思ふことでありまして、眞に國を偉大にし、又己の知識を研磨する考を持つて居る人でありませうれば斯の如き狀身に満足を致して居ることは出來ぬ、試に今世間に起つて居る所の最も自負心の強い人々の云ふ所を一二擧げて諸外國の有様と比較すると云ふことは、又彼を知り己を知る上に付て多少の利益の無いことではなからうと思ふ、

元來私は前申しました如き思想を持つて居るが故に、瘦我慢でも日本の方を良く言ひたいのが寧ろ私の病と言はるゝ程に友人から忠告を受けた程の日本最負の人間である(拍手)是まで随分公衆に向つて崇拜時代を憤慨することが強くして、多少は日本人はエライと云ふことを世間に大聲疾呼して呼ばはつた所の一人である、嘘があつても宜しい、其は日本の元氣を回復するの利益ありと考へて筆に書き

口に唱へる事數年の久しきに及んだ一人でありますが、今日自負時代、多少私等と同感者が多くなつて、自負の念が大に起つたと云ふ今日に當つて、唯チダテルばかりに掛ると、世間の人を誤り、事實を殺すと云ふ結果を生ぜんことを恐れますからして、今日は虚心平氣に彼と是とを較べて、自負時代は果して直打あるものであるや否やと云ふ一般を諸君に御話致さうと思ひます、

先づ戦の結果として起つた所の自負の觀念でありまするが故に、第一に日本の勇氣、彼と是とを虚心平氣に較べて見る、全軀曲げても日本を良く言ひ過ぎると云ふ私の口から虚心平氣に較べると言つても、全くの虚心平氣でなく猶ほ多少の最負があるかも知れませぬと云ふことは豫め御承知ありたい、最も日本人が勇氣に富んで居ると云ふことは、日清戦争の結果を見て、あれだけ武勇を顯はした、支

那人を打破つた所の兵を見れば英吉利へ攻めて往かうと、露西亞と戦ふても心配がないと云ふのが世間の自負時代の率先者と言はるゝ人の腦中に起つた所の考へであつて、我々屢々耳に致しまする故に、先づ日本人の勇氣と云ふものは如何なるものであるかと云ふことを虚心平氣に較べて見ますれば、私は餘り我同胞兄弟の殘念ながら勇氣に重きを置くことが出来ない、如何にも支那に對して非常な艱難辛苦を致して立派な功を奏したと云ふことは實に感服の外はない、併ながらあれだけを以て世界列國と較べて日本人に勇氣があるか否やと云ふ點に至つては未だ輕々しく然りと答ふことは出來ぬのであります、先づ日本全軀の人民……一個人に付て勇氣の性質を擧げて考へて見ますれば、我所謂勇と云ふものは西洋人の勇と云ふものとは無論違ふ、彼は爲すべきだけの準備を爲して、而して他に

道がない他に施すものがなければ、其時に當つて降参を致すと云ふは決して勇者たるに反かざる舉動であるのを我は却つて臆病未練の働きと考へた、宗教上の考から出た考であるや否やは知りませぬが、兎に角勇者たるに反むかぬ、然るに天命を待ずして人事窮すれば割腹して死ぬると云ふは我國に於て勇士のする仕事であります。が、單に降参を致すと云ふ點から見ますれば西洋人は臆病にして、單に死ぬと云ふ點から見ますれば、日本人は勇者にして西洋人は臆病者と世間の人は動もすれば云ふのでありますけれども、是れは單に判斷する所の標準となすことは出来ない、單に男女の痴情の爲にも情死位致します、情死杯の爲に死する所の人間杯は歐米諸國よりズット多くございませうが、一時感情が激する所から何も考を運らす違あらずして死ぬのであります、單に斯の如き死にやうを致すのを

勇士杯と判斷は致し悪いであります、私は西洋物指しに依つて判斷するものではありませんが、又必ずしも我同胞兄弟の間に行はれて居る物指しに依つて判斷するのは誤りない物指しであると云ふことは言ひ兼ねるのであります、先づ極く分り易く一二の例を擧げて見ますれば、我國の勇者は腕捲りを致して居る、勇者たる者の働きを見ますると、車に乗つて行く所のものを突然打ぐり倒す、彼は壯士である、二三人寄つてステッキ杯を持つて打擲することは現に壯士杯がやる、何も手に持たぬ者を切つても壯士である、我同胞兄弟の間に於ては刀を持たない者に向つて刀を使つても勇者たるに耻ぬとしてある、二人三人も掛つて一人の人間を打ぐつて意氣揚々として人も許し又勇者たるの仕事をするものとして居るに違ひない、併ながら私は極めて反對の考を持つて居る者で、棒も何も持たぬのに棒を持

つて之に向ふと云ふのは實に臆病未練の働きてなければならぬ、一人の人間を打つのに二人三人で之を打ぐると云ふとは、實に臆病未練の所作と私は考へて居るのであります、獨り私が考へるのみならず、我國に於て苟くも勇の何物たるを知り武の何物たるを知つて居る者は決してさう云ふことは致しませぬ、世に所謂壯士と言ひ世に所謂勇者と云ふは漢として居りますけれども、眞に武勇を以て自任する義俠家であるとか、擊劔家、又は卑い博徒の如き彼は義俠武勇と云ふものを以て殆んど己の責として居る、彼等の所行は極めて賤むべきものであるけれども、勇武を尊び義俠を尊ぶといふ點に至つては博徒と雖も猶ほ尊ぶべき所があると信じて居る、彼等の間に行はれるものはどう云ふものであるかと言へば、打つに棒を持つてすると云ふが如きことがあつたならば、彼等の社會にあつては擯斥する

る、一人をイッむるに數人の力を持つてすると云ふが如きことがあれば決して齡いせぬ、殊に博徒の如き大勢群を成して居る中に一劔を掲げて飛び込むと云ふものは澤山ありますが、一人の敵を討つのに徒黨を募つて行くが如きは夢にだもしない事柄である、即ち眞正に勇と言ひ武と云ふことを知つて居る社會に於ては、我帝國に於ても決して唯今申す如き卑劣の所行はなさないけれども、一般の社會は年々歳々、議會の開會中の如きも私杯も狙はれて居りますが、壯士と言つて壯んと云ふ字を書くので、何も持たず車に乗つて居るのに二人三人襲はんとして居る場合に遭遇して居ります、實に驚き入つたことで、何たる斯の如き柔弱な男子、男子一人をイッむるに仕込杖所か棒も入らぬ、通常の人間は腕を振つて澤山である、腕でイッむることを知らず刀を持つて居る、まだ刀のみでは不案内と思ひま

して二人三人も黨與を募つて來ると云ふ年々歳々私が目撃する所の事柄で、社會は如何に之を見るか、此臆病者を稱して壯士と稱する社會は此卑怯なる者を稱して彼等は中々勇氣のあると申すは實に驚き入つたる次第と言はなければならぬ、

扱て歐米諸國は如何なることであるかと云ふと、云ふまでもなく其やうのことは社會一般子供に至るまで擯斥して、殆んど人間社會の行爲ではないと思ふことであらうと思ふばかり、非常に擯斥を致すのである、一人をイッむるに二人も掛ると云ふやうなことを致しますれば、知己朋友は決して其人間と交際を致さぬまでに擯斥して、車挽、魚賣の如き下賤なる者に至るまで敵の虚に乗じてイッむると云ふことは致さぬ、况んや彼は棒を持たずに居るのに我は棒を以て之に應ずと云ふことは決して下賤の人間と雖も斷じて爲さぬ、

若し爲せば朋友親戚に至るまで輕蔑致して離ひせず、社交外に拒絕すると云ふのが歐米間に行はれて居る所の事實である、私が殊に感服したのは相手は船頭であります、私が雇はんとする所の船頭が英吉利人でありましたが、一人の船頭を雇はんとする時に他の一人が這入つて來て喧嘩を致した、其喧嘩の仕方に関服致したことがあります、それは何でも無い、二人喧嘩を致すと英吉利流で拳を持つて腮を突き上げる、一人は強かつたが爲に二三合の中に打ぐり倒されて仕舞つた、日本に於て其やうな場合には倒した奴は倒れた奴の上に乗掛つて十分に打ぐるであらうと思ふ、アワヤと思ふて及ばずながら叱からうと思ふて駈け付けたことがあります、倒れた奴が倒れた奴を抱き上げてやる、さうして立上るのを待つて泰然と構へて居つて、まだ勝負をするならやつて來いと言つて宛も我劍

術使ひをするやうな有様で、掛つて来るまでは少しも虚に乗ずると云ふやうなことはなほぬ、二度目の打たきあいに同じ奴が打たき倒された、此度は満面に血が出ましてございしますが、倒された方は非常に酷ひ有様でございました、それから川へ行つて顔を洗つて来るまでジツと待つて居つて、復た拳を固めて三度打ぐり合ひを致しました、其間と雖も虚に乗じて人の頭を切ると云ふやうなことは致さない、併し彼等のみの舉動でなく所謂社會と雖も皆此通りである、我勇氣あり、武ありと言はれた所の帝國社會にあつては子供から大人に至るまで、上等の社會でも下等の社會でも人と喧嘩をして相手を倒すと上に乗り掛つて亂暴を致すと云ふのが一般に行はれて居るのであります、其が果して勇者の働きであるか、是れ臆病未練なる人の働きと言はぬはならぬ、彼既に虚を示した所に乗じてイヅめる

と云ふが如きは決して博徒と雖もなさず、擊劍家は無論なさぬ所、勇の規則に於て違つた所のものであると云ふのは明かである、然るに彼にあつては残念ながら其規則が行はれて居る、我の社會にあつては之が行はれて居らぬと云ふ一點を認める、即ち我同胞兄弟の武勇に於ては、勇氣を試みる場合に於ては著しく彼と是との間に於て相違がありはせぬかと残念に思ふ、殊に戦杯の事柄は我兵隊が力めたと云ふことは無論であります、彼は艱難辛苦に能く堪へたと云ふことは實に感涙を流すの外はありませぬけれども、彼等は果して歐米諸國と對等の戦ひを爲すや否やと云ふ點に至つては急に斷ずることが出来ない、我同胞兄弟は死すとも一步も譲らぬと云ふことを言ひますけれども大丈夫であると言ひますけれども直に……傲慢自負の心を起しますからいけませぬ……

普佛戦争の時に當り絹が天幕の裏にあるのを獨逸人が見出して、斯の如き兵隊が何の役に立つものかと普漏西の士官が傳へて笑ひ話にしたと云ふことを聞いて居る、果して我諸將校中には絹の裏を付けて居つた人がなかつたか、純粹の武官ではありませぬけれども、甚しきに至つては大連灣上陸より凱旋に至るまで西洋の寐臺以外には寐たことのない武官がありました、凱旋の當時に至るまで殆んど……殆んどではない全く暫くも西洋の寐臺を離れたことはない、同じ物を徹頭徹尾用ゐて居りました、同じく武官たりと雖も兵隊を率ひて戦ひをすることを職業として居る武官でない會計課の武官であつたと云ふことでありますが、宛も陣中に於て佛蘭西の士官が天幕の裏に僅の絹を用ゐたと云ふ點を笑はれたと云ふ類ではない、支那人に較べて見れば弱い者も比較的強く見へました、私と雖も隨

分勇者になれると自から信じて居る、此度の戦に於て彼は直ちに逃げたのである、殆んど抵抗したのは平壤の戦ひの場合では餘程彼は抵抗も致したでありませう、海軍の戦に於ても彼は十分に抵抗をしたのである、其後に於ては到底力及ばずと考へて降参したのは事實である、其戦ひの一事を以て我兵は第一の強兵なりと速量するは大なる輕卒と言はねばなりませぬ、歐洲にては一朝戦ひあるに當つては、一將の下に、一の城に十萬二十萬の兵を集めて戦ひすることは胸にありますれども、我今日の大戦争に於ては一箇所で十萬の兵を集めて戦つた戦ひがありますか、唯十萬の兵を以て戦つたのみで、殆んど一箇所五萬の兵を用ゐたにけでありまして、死人も少い病人も少い、土耳其の如き弱國と雖もクリミヤの戦争に於て創傷を受けた者が萬を以て數へる程もある、又虜になる者が三萬有餘人あると

云ふことである、支那に於きましても兵隊が少く、我も兵隊が少いが故に、實に中堅の戦ひでありますから膽の大小輕重は殆んど日を同じくして語ることが出来ない、即ち二十萬三十萬の兵を一言の下に集めて同一の訓令を與へると云ふに至つては我果して出來得るや否やと云ふことは、願くは此事が出来るやうに是から苦心を致さなければならぬと云ふことは辯を俟たぬのである、今日に於て高慢自負の念を起して、我は第一の強國なりと判断を下すは國の衰へる始めであるからして、此點に於ては青年諸君に於て御注意あるべきことであらうと思ふ。

それは勇氣の比較であります、道德を比較する點に致しまして、私は彼と是との間に於て自負論者の云ふ如く相違はない、我にも彼にも侮るべからざる長所があると云ふことは、如何に日本最負

と雖も許さなければならぬ、歐米人には道德がなくして仁義忠孝の何物たるを知つて居らぬが如く云ふのは非常なる誤りである、若し自負でない方便の爲に述べるのであればそれで宜しい、眞にその様に考へて居ると大層な違ひである、第一家庭の有様を申しますと、一國道德の有様は分ります、彼の讀む所の新聞と我の新聞に於て猥褻卑猥の點が何れに多く何れに少きか、我讀む所の小説と彼の社會に於ける小説と何れが果して高尚なるものであるか、彼等の小説の如きは日本一般の小説に較べますれば決して彼の小説が猥褻とは言へませぬ、家庭の有様、新聞の小説まで、總べて種々なる平素の談話なりを彼と是と較べて、我の家庭の能く治まつて居ると云ふとは見られない、小供の前でも猥りな話をして、不都合なる新聞の小説の如きものを其處に現はして置くと云ふ一點に於きましては、日本

の取締りは極めて亂雜なりと言はなければなりません、従つて其原因は我にあつてはさう云ふ父母兄弟なる者が子弟の前に於て猥褻な話をする、嘗に猥褻な話をするのみならず、甚しきに至つては神聖なる己の家に腐敗したる藝妓杯を客人に饗應致し、藝者と戯むるゝが如き醜態を見聞せしめて衆に誇ると云ふが如き、殆んど上流社會に於ては皆な是等の有様で、悪るいものを見せ悪るいものを讀ませ悪るい話を聽かせ悪るい事實を父母兄弟たる者が日々子弟の前に示して居ります、五時間六時間なり學校で教育を受けましても藝妓のノロケ話をする父母の薰陶の方がズット優りまするが故に、徳義の點に於て欠點のある所の子弟を生ずると云ふことは絶えて怪むに足らぬことである、併ながら是れは敢て父兄のみを咎むることは出來ない、子弟と雖も父兄に直ぐなりまするが故に、今世間の子弟と

雖も決してさう云ふことばないやうに、外の人に向つては決して悪るい結果を生ずべき話をせず悪るい行をせず、ヨシ悪るい行をしませした所が之をば世間に隠くすと云ふが如き、隠す位の廉耻心がなければ家庭は亂れ一國道德の進歩はしやうがない筈であるが故に、少くとも言語を慎み讀む物を慎んで、人の耳目に觸れる所に於ては不都合なことを致さぬと云ふ實際の行が現はれて居るならば之を來せる原因を尋ねなければならぬ、道德の觀念の少い者か斯の如く家庭の規律を嚴重に爲すことが出來ますか、道德の觀念の少い人間が果して斯の如く社會の規則を嚴重に致すことが出來ますか、此一事を以て見ても我獨り仁義道德の觀念に富んで居ると云ふのは、是れ盲ら判断、彼を知らず己をも知らぬ、却つて治つて居る所の彼をも知らない盲ら判断と申すより道がないのであります、

又人の道徳心の強弱を計るのに、其人が優れるものに對して如何なる働きを爲すか、劣れる人間に對して如何なる舉動を爲すか人の廉耻心の強弱を計るのには最も見易き事柄である、私が曾て此事を観察致した、私は我同胞兄弟の爲に萬斛の熱涙を濺いだことがあります、試みに我同胞兄弟日本全國の人間は皆是なりと言つて敢て誤りがあるまいと考へらるゝが、我同胞兄弟が強い者に對する有様を見る、又轉じて弱い者に對する有様を見る、優れる者に對する有様と劣れる者に對する舉動とを較べて見ますれば、我同胞兄弟中支那朝鮮安南印度、斯の如き日本より劣等なる、日本より文明が遅く居る所の國々に參つて居る所の同胞兄弟の舉動如何と云ふことを御覽になりますれば、詳しくも知りませぬけれども、私が鳥渡見た所に依りますれば支那朝鮮印度安南等に於ける日本人程……傲慢

なるはなく是等の地方にも他の外國人が無論參つて居る、是等の日本より劣等なりと聞えて居る所の劣等國人に對して、日本人程傲慢無禮なる者は私は見なかつた、歐米人より傲慢不遜である、日本人は弱者劣者と看做しますれば日本人の傲慢無禮なることは確かな例である、然らば亞米利加に居る日本人は如何、是は度々通信に係る度々歸朝者の話にも上つて居ることでありますが故に、諸君皆御承知に違ひない、歐米諸國に居る日本人、人の前に出ても人の少い片隅に這入つて小さき身軀を尙ほ小さく、大道の眞ん中を歩くのにも成るだけ知れないやうに竊み歩るきをする、非常に卑屈なる有様を致して殆んど西洋人に對して對等なる交際を爲して居る者は先づ無しと言つても差支ない程である、全軀から見渡しますると、亞米利加には歐米の國の人は皆參つて居る、印度人も參つて居る、亞

弗利加の黒奴も参つて居る、日本人も参つて居る、敢て歐米諸國に於て謙退辭讓と言へば立派であるが、卑屈なる後とすざりをして居るのは支那人にあらざ亞弗利加の黒奴にあらざ、却つて日本人にあると云ふことは世間の人は皆知つて居らるゝ通りである、謙遜辭讓なる我同胞兄弟は然らば何ぞ支那朝鮮に於ては斯の如く傲慢無禮であるか、支那朝鮮は少しばかり日本より劣つて居る、歐米人は何だか少しばかり優つて居る、劣つて居れば傲慢無禮なりと云ふに至つては、言語同斷である、朝鮮に居る所の日本人は、己れ達の爲に朝鮮の獨立が出来たと、宛も自分が朝鮮の獨立を扶持して居るが如く傲慢なりと云ふ、公使館領事館杯の人が屢々苦情を申す所の事である、斯の如き僅かばかりの恩を掛けて少しく向ふが劣ると見れば傲慢無禮の舉動が多い、西洋人に遇へば縮込まつて畏縮して仕舞ふと

云ふ、人間が是が果して道德心に富んだ人間と言はれませうか、私は強に諂らひ弱に傲る人間は卑劣の性質を顯はすものであると言はねばならぬ、我同胞兄弟が斯の如き舉動を爲すと云ふに至つては私は残念に絶へませぬ、先年大津に於て露國皇太子に傷を負はせたが極く瑣細なる傷であつた、露西亞は日本とは餘り親密でもない外交上に於ても猶ほ歴史上に於ても疎遠なる國である、此疎遠なる國の太子、國王でもなく皇后陛下でもなく、太子を巡査が少しばかり傷を負はせたと云ふを以て、日本に於ては全國人民殆んど我父母を失ひし如く、其不幸を御見舞の電報が殆んど皇太子の館を埋めたと云ふ程であつた、政府が之を煽動したと云ふのが一原因でありませうが兎に角一大騒動を致した、政府にあつては遂に大臣中にも辭職するのみならず、甚しきに至つては憲法を曲げて皇室罪に處しやうとま

でした、諸君此間のことであるから知つて居らるゝのでありませうが、朝鮮に於て日本の兵隊が王妃を殺すと云ふことに關係を致したと言ふことは先づ事實であるとするより外仕方がない、斯の如き有無を探ぐるに最も便利を持つて居る政府は自から公使を免職を致して、公使書記官兵隊の頭及び其他の人々を皆んな廣島の牢獄に繋ぐと云ふまでの運びを致して居る、故に先づ我々にあつては彼が是に關係をしたと云ふ判断より外仕方がない、唯此巡査にあらず我日本を代表致す所の公使たる者が關係を致し、相手は、輕傷でなく全く殺された、極く親密にして居る所の尙ほ我が助けてやらなければならぬ所の朝鮮の王妃、果して然らば先年の大津事件と比較して何れか重いか、朝鮮は大切である、苟くも血誠あるものであるなれば露西亞皇太子に輕傷を負はせたのは輕いと云ふことは考へる、然るに實際

の有様は果して如何、一人の電報を發する者もなく、一人の涙を濺ぐ者もなくして、先づ宜いキミだと言はぬばかりの有様である、何せさうであるか、歴史上の關係から申しても彼と是とは同一の論にはあらざるに、我同胞兄弟の感情の動く所が何せ反對であるかと云ふに、色々な原因もありませうけれども露西亞は大きくして強く、朝鮮は小さくして弱いと云ふ卑劣なる考に基くものであると私は云ふの外はない、實に殘念至極である、私は斯の如きものに向つて惘然として悲む、之が果して道徳心の強い、道徳の何物たるを知つて居る者であるか、斯の如き卑劣なる………兎に角事實の上に形が現はれたもので、斯の如き卑劣なる舉動が國民の舉動として現はれたのは、今までの歴史の上に於ても見た事もない、今日始めてであるのに然かも卑劣なる事實が我同胞兄弟の間に現はれたると云ふ一段に

至つては實に慨歎の至りに堪へませぬ(拍手喝采)
 此他名譽を重んずるか輕んずるかをたづねますれば我國
 でいふ名譽と申す言葉が少し惡るいやうである、我國一般に使つて
 居る所の名譽と云ふ語は極めて卑ひ卑劣なる所に使つた名譽で、今
 の名譽と云ふことは Ambition 私の云ふ名譽なるものは、名
 節と名付けたなれば宜くこの名譽に當て嵌まる所の事柄であります
 が、兎角名節心の強弱厚薄と云ふものは一國の道德の厚薄を計るの
 一の標準であります。我國の名譽心なるものを一論するのは一朝
 一夕に論ずることが出來ぬ、詰る所一つの證明を求めますれば、名
 譽の爲に死す、名譽の爲に命を捨てること云ふことは世人の所謂道德
 の觀念に乏しいといふ歐米諸國に於て少きやと言へば、是れは御調
 べになつた事はないかも知れませぬが、是れは幾らも調べることの

出來るものでありますから、心ある方々は調べて御覽になれば、自
 殺する者、即ち名譽を重ずる爲に自殺する者が西洋に多くして日本
 に少いと云ふ事が統計の上に現はれて居る、男女の痴情の爲に自殺
 する者は日本に一番多い、一朝忿怒の爲に自殺する者が日本に一番
 多い、宗教上の結果であるが何の結果であるか知りませぬが、日本
 の方が命の直段が安いと云はなければなりません、其直段の安い日
 本に於て名譽の爲に命を捨てるのは日本に少い、例へば西洋である
 ならば取引所、米商會所と云ふが如き所、重なる博奕場所、それに
 關係する所の者は道德社會から、道德家の目から見ればあるべから
 ざる事をすると云ふ、その取引所、博奕場所に至つて他の國に於ては
 年々歳々自殺者を生ぜぬことはない、何が爲に自殺する、大山がはず
 れて殆んど世の中に顔出しすることが出來ない、友人親戚の前に顔

出しすることが出来ない」と云ふ、道德の點から見れば極めて卑い投機商賭博者の如きもの年々歳々自殺者を生ずる、然るに我國に於ては御承知の通り大坂の堂島其他相場をする所の博奕場所に於ても失敗者のない筈はないが、失敗して名譽を保持する爲に自殺した者はない、大坂には中野梧一と云ふものが自殺したが相場で失敗したか、政治上の原因よりの自殺であるか今も猶ほ疑問に屬して居る、あれはヨシ相場で失敗して自殺した所が、是れは名節を輕んずると云ふものではありませぬ、私は是れに就て事實ありさうなものだと思つて大坂に避んだ時に堂島邊の詳しく知つて居る人に尋ねた所が、大坂には今私が云ふ自殺者を生ずる場合、大失敗をして世間に顔出しが出来ぬと云ふやうな場合に於ては、堂島に於てはどうしたかと云ふと、其場合に於ては失敗者が、是が仲買人でありますか御

客さんであるか知りませぬが、失敗者が先づ堂島の所にある河へ身を投げる、時刻が定まつて居りますから其人を連れて行きます、同じ仲間が船を繋ぎ置いて置いて河から救ひ上げて外へ持つて往くと云ふ習慣が存して居る、今あるかないかは知りませぬが、河へ身を投げる前に申し合せて置いて仲間が直ちに救つて生き歸つた者として再び社會に顔を出させると云ふ習慣があると云ふことを聞いた、是は兇戯に類すると雖も多少名節を重んずる、死ぬまでに重んぜぬから死ぬ真似をすると雖も、猶ほ爲さるるに優さつて居ります、一死以て知己に謝するに至らなければ道德の觀念があるものと言へぬ、又自殺の統計上から申しますると是は日本でも何處でも同じであります、自殺の統計上から申しますれば、牛殺しは我國に於て牛の食ひ方が少いから澤山あります、牛殺しが西洋に於ては多い職業で、牛殺

しは何れに於ても日本に於ても大層自殺する、恐らくは名節の爲ではなくして、平素残酷の所行を爲して自分の命が吝しげなくなつて己を殺すと云ふやうになるのでございませう、それから代言人醫者と云ふ者が何處の國に於ても自殺の多いものである、自殺の統計上から言へば第二に代言人、第三に醫者と云ふことが出来る、代言人醫者と云ふ者が常に並んで居る、日本ではさうでなからうと思ふ、是等が日本社會の道德の觀念を證明する所の一つの材料ではないかと思はるゝ、何ぞ彼等は自殺致しますか、色々の原因がありませうけれども眞に考へて見れば彼等は業務の然らしむる所か門戸を張り過ぎる、立關構へを大きくして如何にも我れは客を澤山持つてある病人や依頼者を澤山持つて居ると云ふ顔付きを致さないで、どうしても裏店などに住んで居つては醫者代言人は何れの所に於てもハヤ

らない、彼等は業務の必要上より門戸を張り過ぎると云ふことが何れの國に於てもある、而して一度門戸を張りますれば思ひの如く繁昌を致さずして、暮し向きを締めやうと致しました所が、彼等は門戸を締めやうとしても立關構へを大切にする者が一度大きくなつた所の立關を締めたなれば、病人や依頼者が減る、扱てさうなつた時には唯名譽を完ふせんとすれば早く命を終つて仕舞ふ外ない、何時までも命を長らへて居ると耻を搔く外はない、業務の必要に連れ、て生活の度を高め過ぎるが爲に歐米諸國に於ても醫者代言人と云ふものが自殺の最高度を占めて居る、我邦に於ては醫者の自殺者代言人の自殺者は多くない、醫者代言人の自殺者が餘りあると云ふことを聞かざるのみならず、若し代言の依頼者が少なくなると、出来ない訴訟を頻りに押し付けて悪るい代言人となる、遂にそれでも食

へなくなれば詐欺師となると云ふのが我邦代言人社會、醫者に至つてはハヤらぬば賄賂を取つて毒を盛ると云ふことをしても猶を命を長らへて居ると云ふのが我邦に於ける醫者代言人の一般に現はれて居る習慣と言はなければなりません、それを自殺する所の人間と較べますれば、道徳上の觀念は多言を待ずして明かに分るだらうと思ふ、

其他智識の比較等に致しましたならば、容易に云ふことは出来ぬけれども、恐らくは世間皆定論あらふと思ひますから私は敢て知識の比較を喋々述べませぬが兎に角勇氣の點から見ても將た又道徳の點から見ましても又身軀の力の點から見ましても無論我國は世界一等なりと云ふことは出来ざるも、今日に至つては何だか一番エライ者の如く考へる者が一時に多くなつたと云ふことは、之が爲に國の進

歩が益々遅くなりはしませぬかと云ふ杞憂を爲さざるを得ませぬ、現在に於ては日本の進歩は迅速なりと云ふことを得ませぬ、誰でも日本國程早く進歩する國はない、進歩の點に於ては日本は隨一である、大抵の人十人が九人まで信じて居るです、私も此點に就て終日人を雇ふて産業の點、或は鐵道發達の工合、或は會社の工合、但しは外國貿易發達の工合、形而上の點までも調査致させて見ました、所が案外日本は進歩が迅速でないのみならず、歐米何れの國に較べましても日本程進歩の遅い國はないと云ふことを發見しました、第一に鐵道を見る、全國蜘蛛の巣を張つた如く敷き結めて一年／＼に出来る所の、日本の如き始めて十四五年前から盛に造り出したと云ふ國に較べますれば餘程少くつて宜しい話で始めて着手する國は十哩、……歐米諸國の如き全國往き渡らざる所なく、今日に

及んで作り方は極めて少くつて宜しい筈であるのに、兎に角日本と較べて一年の作り高を較べましても尙ほ日本が少い、日本程一年に鐵道の少い哩數を造る國はないのみならず、印度と雖も日本の二倍以上も造つて居る、又外國貿易の進み方も弱い、成る程何年前と今日と較ぶれば今日は多いと云ふ計算になつて来る、三四十年前には一つもなかつたのですから、之に反して七年前と較べて何倍とか何割りとか云ふ數へ方に至つては日本より、併ながら是は眞に比較する人が、凡そ國の大小と進歩の多少を見て、彼は前十年間に幾ら増加して他の國は何億萬圓であつたとか、前五年間に於ては何億萬として較べますれば日本の外國貿易の一年の増し高程少い國は世界中にない、印度と雖も日本の十倍を有して居る、歐米諸國に於ては近年不景氣の爲に増さずと減つたと云ひますけれども、

苟くも増して居ると云ふ時に至りますれば……鐵道既に然り、貿易既に然り、然らば進歩の一原動力と云ふべき教育の有様は如何、學齡兒童が年々歳々、學校に往く就學兒童の數は日本程増し方の少い國はない、支那朝鮮は特例として日本の就學兒童の遅い國はなし、其他色々な調べもありませんけれども、徒らに諸君を勞らすのみでありまするが故に取て云ひませぬが、兎に角虚心平氣に、國家の元氣を如何せんと云ふ點から考へて見れば、進歩の點に於ては日本は迅速なり世界列國比類なしと考へて居つても、一番日本の進歩が早いと云ふ位置に立つて居らざるのみならず、日本の進歩は一番遅いと云ふ事實が分つて來まするが故に、今青年諸君が世の中の新聞に書き演説に唱へる所の、それ等の事に惑はされずして虚心平氣に考へる可きは考へ、日本社會、眞正の勇氣、道德、智識の點に付

て、物質的發達の上に就て如何なる點に付ても我が云ふ如く萬目祝すべき時にあらずして、萬目悲むべき位地に在る國家を背負つて、第二の日本帝國の世になさなければならぬ、諸君に於ては勇進奮行を致して世界第一勇壯國たらしむるは我國の青年たる諸君に於てなすべきことであらうと思ひます。(拍手大喝采)

東京基督教
青年會叢書

名家時論

第一 襍終

明治廿九年七月二日印刷
全 年七月五日發行

定價金廿錢

編輯兼發行者 神田區美土代町三丁目東京青年會 丹羽清次郎

印刷者 京橋區西紺屋町二十六番地 高田乙三

發行所 神田區美土代町三丁目三番地 東京青年會

印刷所 京橋區西紺屋町二十六番地 株式會社 秀英舍

賣捌所 京橋區出雲町一番地 警醒社

版權
所有

◎東京青年會事業◎

(一) 夜學校英語學部

現今我邦に於て英語を修むるもの其數甚だ多く之を教ふるの學校亦少からずと雖ども教師其人を得ず教授宜しきに合はざるが故に能く英文を解し談話文章に巧に英語を操るに至るもの誠に僅なり本會は此缺を補はんを欲し夜學校に英語學部を置き普通科三年高等科三年の課程を設けたり

學科 普通科 發音、綴字、習字、講讀、讀方、書取、會話、邦文英譯、作文書翰文、記事文、商用文

高等科 講讀、會話、朗讀、演說、討論、邦文英譯、作文商用文、記事文、論文

學期 前期授業 自九月十六日至翌年二月十四日

後期授業 自二月十五日至七月十五日

休業 日曜日、土曜日、大祭祝日、冬季休業(自十二月廿五日至翌年一月七日)及び夏季休業(自七月十六日至九月十五日)

授業時間 九、四、五、六、七月

自午後六時半至同八時半

十、十一、十二、一、二、三月

自午後六時至同八時

入學金 普通科 金五十錢

高等科 金壹圓

但し東京基督教青年會員は之を納むるを要せず

授業料

普通科第一年 一ヶ月 金五十錢

高等科 一ヶ月 第一年 金八十錢

同第二、三年

同

金六十錢

同

第二年 金壹圓

但し九月及び七月は半額を徴收す

撰科

普通科高等科各級本科生に缺員あるときは撰科生の入學を許

し本科生の修むる課業の一部(例へば邦文英譯、作文、會話

課)を隨意撰修するとを得しむ但し撰科生授業料は別に之を

定む

校長

丹羽清次郎

英語學部主事

文學士 村上直次郎

外國教師

- バチエロル、チー、スウィフト
- アル、エス、ミルラー
- ミス、エー、マッコレト
- バチエロル、オプ、デビニチー
- エツチ、エツチ、ガイ
- バチエロル、オプ、アーツ
- エム、ピー、マツデン
- マスター、オプ、アーツ
- ダブルユー、ケー、アズピル

教員 帝國大學高等商業學校或は外國に於て多年英語を學び教授に熟練なる人數名

(二) 日 曜 講 演

毎日曜午後二時開會し宗教、哲學、社會上の問題等最も當世に必要なる講演をなし専ら青年の精神修養、志氣振發の鼓舞者となり進んで青年に上帝を敬し、基督を愛し人道を踏むの教訓者たらんことを期す、本會の期望斯の如し而して今日まで實に良結果を得、毎會聽

衆二百内外にして我國唯一獨特の青年集會場なり

專任講師は松村介石君なり
(三) 聖書研究會は毎週之を開く、(四) 交談會は時々有志青年と會し放膽活意自由に感想を交換し眞理の研究を計り修養の道を講ず

(五) 書籍縦覽室

本館内清閑なる書籍室あり内外の書籍を備ふ特に新刊書籍は勉めて之を蒐集し會員の縦覽に供す

(六) 新聞縦覽室

本室へは會員は勿論何人と雖來讀するを得、備付の新聞雜誌は數十あり、

(七) 『基督敎青年』

は本會の機關にして宗教學術、社交、體育等凡そ青年を敎へ導くの講話論說等を集め特に全國の青年會の互ひに氣脈を通じ會運を活潑

ならしめんことを勉む、且つ過般來英文欄を設け歐米の青年會と其所見を交換せんことを以てす 價一冊金五錢

(八) 寄宿舎及び下宿屋紹介

本會寄宿舎は神田區仲猿樂町十四番地に在り本會々員及び敎師其他身元慥なる人々の保證人あるものは入舎することを得、千田時次郎君は之れが寮長たり

本會は良善なる下宿屋數軒と特約あれば志願者の希望に依り其下宿屋に紹介すべし、

(九) 學術講演

時々名士學者を招待し青年の爲めに有益なる學術講演を開く昨年十一月來本會の請招に應じ來演されたる講師は徳富猪一郎、志賀重昂、大西祝、尾崎行雄、高田早苗、肝付兼行、寺尾亨、榊俣、富田鐵之助、大澤謙二、坪井正五郎、島田三郎、三宅雄次郎の諸君其他の名家なりとす以て本會講演の社會に有する勢力の如何を知るに足らん、

入會手續

- 一 凡そ品行方正なる青年は本會々員たることを得而して福音主義の教會に屬する者を正會員とし其他を准會員とす
- 一 通常會員たらんと欲する者は毎年金五十錢、特別會員たらんと欲する者は毎年金壹圓、維持會員たらんと欲する者は毎年會費金三圓終身會員たらんと欲する者は一時に金二十五圓を前納す可し
- 一 通常會員は本會理事會に於て制限したる特許を受け特別會員維持會員及び終身會員は本會の與ふる總ての特許を受くることを得可し
- 一 入會せんと欲するものは的當なる紹介を経て本會に申込む可し

神田區美土代町三丁目三番地

基督敎青年會



